特集1｜続・生き続ける建築

5

渡辺仁は帝国大学工科大学の卒業と同時に独立を望んだが、父の勧めによって鉄道院に入り、5年後には逓信省に移った。
逓信省では官庁でありながら自由な気風のもとで、いち早くゼセッションスタイルの流れを受け止め、
吉田鉄郎、山田守など、次代への橋渡し役をしたという。
そのかたわら積極的にコンペに参加し、歴史主義の習熟を見せながら名作を生み、彼の名は建築界に広く知れ渡っていった。

父の逝去を機に念願の渡辺仁建築工務所を開設したのは1920年、33歳だった。
しばらくして1年余りの欧米旅行に出るが、そこから渡辺仁のデザインにはモダンな味が加わり、
さまざまな様式を自在に使いこなす技には、さらに幅が出た。
時代の要請に従ってデザインを巧みに使い分け、ついには、モダニズムへとつながる建築界の変革期を担った功績は大きい。
しかし、彼は自らの建築観を書き残さなかったという。すべて作品に心血をそそぎ、結集したのだろうか…。
今回は、卓越したデザイン力が厳然とみなぎっている渡辺仁の作品から、彼の建築観を解読した。

渡辺仁

Jin Watanabe

提供：高木秀寛

卒業設計「A Memorial Art Gallery」詳細［部分、1912］
［所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻］

歴史主義の成熟とモダニズム｜大川三雄｜Mitsuo Ohkawa

1——生い立ちから事務所開設まで

渡辺仁は、明治20年［1887］2月16日、渡辺渡と寿美の長男として生まれた。父親は日本の鉱業界の先駆者で佐渡支庁長、鉱山局長などを歴任した後、東京帝国大学工科大学学長を務めた人物である。渡辺仁は、明治42年［1909］に東京帝国大学工科大学に入学、同期生には竹腰健造、山下寿郎、武富英一、吉田亨二、西村好時などがいる。大学時代は、暇を見つけては関西方面への古建築見学に出かけ、また東京美術学校の吉田博画伯に師事して水彩画を学ぶなど、芸術的な感覚を身につける日々を過ごしていた。

卒業後は、建築家として独立することを願っていたが、父親に反対され、やむなく鉄道院に勤務。5年後には、同期の武富英一に誘われて逓信省に移っている。当時の逓信省は、吉井茂則、内田四郎を中心に、進歩的な人材が集まり、官庁ながら自由な気風にあふれていたからである。逓信省時代の渡辺仁の代表作は「高輪電話局」［1918］と「日本橋電話局」［1920］で、歴史主義からの脱却を目指したゼセッションのスタイルが採用されている。岩元禄、吉田鉄郎[1]、山田守[2]といった次世代による逓信省モダニズムへの橋渡しを演じたのである。

渡辺仁は役所仕事のかたわら、大正デモクラシーの機運の中で急増した建築設計競技（コンペティション、以下コンペ）への挑戦を繰り返している。大正5年［1916］の「日清生命保険相互会社」と「明治神宮宝物殿」、そして大正7–8年［1917–18］の「明治天皇聖徳記念絵画館」、「帝国議会議事堂」などの一連のコンペを通じて、渡辺仁の名前は建築界に広く知れ渡ることになった。いずれも一等こそ勝ち得ていないが、応募したコンペでは必ず入賞、もしくは佳作の成果を上げ、「聖徳記念絵画館」では2案応募し、それぞれが二等首席と三等首席の成績であった。コンペの応募作品には、ドイツのユーゲント・スティル、あるいはウイーン・ゼセッションの影響を強く感じさせるものが多い。いずれも様式的な骨格を残しながら、細部における簡素化、幾何学化が進められた斬新な雰囲気の作品である。

2——独立後の活動

官庁での勤務は8年に及んだが、父親の逝去を機に独立、大正9年［1920］4月に念願の渡辺仁建築工務所を開設した。この大正9年には、日本建築界の父ともいうべきJ.コンドルが亡くなる一方、日本のモダニズムの起点である分離派建築会が誕生した。その前年には辰野金吾が逝去するなど、新旧の交代が象徴的に行われ、歴史主義からモダニズムへという変化の結節点となった年であった。

この時期の作品は、住宅ではユーゲント・スティルとスパニッシュ様式、そしてチューダー様式が多く、住宅以外ではゼセッションや表現派風のものが目立つ。「商工省燃料研究所」［1921］と「龍角散本舗」［1923］は共に表現派の作品である。新旧のさまざまな様式に挑戦する中、大きな変革期に際し、建築界の今後を考える必要から、英、独、仏、伊、米を1年余りかけて巡る海外の旅に出た。昭和元年［1926］、40歳の時である。どのような建築を訪ね、何を感じ取ったのか、その記録は残されていないが、帰国後はさまざまな様式を自由自在に使いこなした上で、かつモダンな味わいが加味された独特の作風が生まれてくる。

3——歴史主義の習熟と展開

帰国後の昭和2年［1927］には代表作である「電気倶楽部」と「ホテル・ニューグランド」が同時に竣

家族写真｜右から2人目が渡辺仁。中央に父と母［撮影：1898年／提供：福田礼／所蔵：日本大学大川研究室］

明治神宮宝物殿コンペ応募案（佳作三席）｜日本で行われた最初期の本格的なコンペ。明治神宮の境内という環境に対応し、かつ耐震耐火の建築が求められたことから、RC造による伝統表現の可能性を問うコンペとなった。最終的には、当選案を参考にして神宮造営局の大江新太郎が実施設計を担当した［出典：『明治神宮宝物殿競技設計図集』［洪洋社／1915］］

明治天皇聖徳記念絵画館コンペ応募案
上——二等首席／下——三等首席
帝国議会議事堂コンペと同時期に行われたことから、議事堂のミニ版ともいえる応募案が数多く提出された。コンペへの応募は1人1作品に限定されることが多いが、この時、渡辺仁は2作品を応募し、2作品とも入選を果たした。明治神宮の境内である"内苑"に対し、葬場殿が置かれた場所に、明治天皇の業績を絵画として展示する絵画館が建てられ、"外苑"として整備された［出典：『聖徳記念絵画館・葬場殿址記念建造物競技設計図集』［洪洋社／1918］］

［1］ 吉田鉄郎［1894–1956］
［参照：『INAX REPORT』No.178］
［2］ 山田 守［1894–1966］
［参照：『INAX REPORT』No.174］

旧日向別邸上屋
上―外観/中―内観/下―庭越しに海を見る
1934–35年にかけて渡辺仁の設計、清水組(現・清水建設)の施工で建設された。1階の居間は、およそ24畳大の板の間の一室空間の中央に3畳大の上段を設けている。一室空間の中に椅子座と床座を共存させる試みであり、上段を部屋の中心に据えた大胆な和洋折衷空間が展開されている。上段の下からは無双窓の通風孔を通して、夏は冷気、冬場は床に設けられた2本のパイプによる温泉熱が室内に取り込まれる。隅窓、水平線を強調した庇、造り付けの収納、ガラス戸と組み合わされた襖などの建具、格天井と網代天井の併用などが特徴で、特に"落とし掛け"を思わせる下り壁によって一室空間を分節する手法で、巧みな和洋折衷空間を生み出している。居間の中央より真正面に初島を眺めることができるが、上屋の竣工時にはほとんど庭がなかったと思われる。2階の客室(4.5畳、6畳、8畳、ベランダ)にも隅窓を設けるなど眺望を重視した造りとなっている

工している。「ホテル・ニューグランド」は様式選択主義の渡辺仁の力量を今日に伝える好例である。

この時期の住宅作品では、学習院を通じて交友関係にあった徳川家の邸宅が注目される。昭和3年[1928]の『国際建築』誌には、麻布富士見町に建てられたスパニッシュ様式の「徳川義親侯爵邸」[1927]の写真と図面が掲載されている。徳川義親家は震災を機に、住居を麻布から目白に移したはずで、この麻布の邸宅の存在は謎である。現存する「財団法人徳川黎明会」[1932]のある目白の敷地には、チューダー様式の「徳川義親侯爵邸」[1934]が建てられた。その邸宅は、昭和40年代に目白から移築され、「八ヶ岳高原ヒュッテ」として使われている。昭和戦前期の上流層の住宅に最も好まれたチューダー様式とスパニッシュ様式という2つのタイプが、同じ徳川義親家のために設計されていたことになる。外観、インテリア共に渡辺仁の住宅におけるデザイン力を示す作品である。また、B.タウトの設計した地下空間で知られる熱海の旧日向別邸の上屋[1935]は、渡辺仁の設計したもので、貴重な和風作品の遺構である。

昭和7年[1932]以降になると本格的な作品「服部時計店(現・和光)」[1932]、「産業組合中央金庫」[1933]、「日本劇場」[1933]、「大阪放送会館」[1936]、「第一生命保険相互会社本館」[1938]などが次々と建てられた。

「服部時計店」は、当時の高さ制限で100尺、その上に30尺の時計塔が載る。通常、8–9階建てに相当する高さを7階としている。ネオ・ルネッサンス様式で、角地に対し丸みを持たせた外観は、古典主義の3層構成の美学にのっとった格式と威厳のある表情を見せる。"銀座の顔"として定着している所以である。1・2階を下層部、3–6階を主要階(ピアノ・ノービレ)、7階を頂部とし、それぞれがコーニス(蛇腹)によって分節され、開口部の意匠と壁の仕上げによって変化が与えられている。中央部では、軒蛇腹の線を一部ずらし、半円アーチの開口でアクセントをつけることで中心性を強調、その上部に時計塔が載る形式を採っている。時計塔のデザインは最後まで決まらず、着工1年後まで決定が延ばされた。その大きさと位置、そしてデザインは全体計画の中で要となるからである。起工から竣工まで2年余り、世界各地からの豪華な材料を内外に使用、請負金額は当時の金額で78万8,370円、坪単価約350円、今日の坪単価で300万円を超える。日本における歴史主義の習熟を示すモニュメントである。

4――コンペティションへの挑戦

渡辺仁は、昭和初年より昭和13年[1938]までの期間を最盛期として数々の名作を世に送り出した。その一方で、略歴に見るとおり、多くのコンペに積極的に参加し、入賞・入選を果たしている。その中でも注目すべきは、「軍人会館(現・九段会館)」と「東京帝室博物館」の2つの日本趣味、東洋趣味を掲げたコンペである。

"帝冠様式"という言葉がある。「軍人会館」のように、洋風の外観に社寺建築や城郭建築の屋根を載せた建築スタイルを指す。帝冠様式の建築はコンペで選ばれ実現したものが多い。そのルーツは、大正8年[1919]の「帝国議会議事堂(現・国会議事堂)」コンペの折に、欧米直輸入の入選案に反発した、洋行帰りのナショナリスト・下田菊太郎が提案した"帝冠併合式"に始まる。当初は建築界の冷笑を受けた下田の提案は、満州事変以後のナショナリズム高揚期に、コンペを舞台として再び返り咲いた。昭和5年[1930]には「名古屋市庁舎」、「大礼記念京都美術館」、「日本生命高島屋」、「軍人会館」など、当時の言葉でいう"日本趣味建築"を求めるコンペが相次いだのである。

"日本趣味建築"とは何か。新技術(RC造)を用いた新しい建築に日本の伝統的建築の具象的モティーフを採用して日本的表現を試みた建築であり、建築における日本的表現を真摯に追及する姿勢から生まれた和風コンクリート造の建築である。"日本趣味建築"と"帝冠様式"とは同根異種の存在として考えるべきである。造型上の相違点は躯体と屋根の関係にあり、"日本趣味建築"は両者の融合を目指しているのに対し、"帝冠様式"の方は両者の対比を意図的に際立たせている点に特徴がある。ナショナリズム高揚期に、日本趣味建築の流れの中から"徒花(あだばな)"のように誕生したのが帝冠様式である。

渡辺仁が応募し選外佳作となった「軍人会館」案は、入選案の中では最も洗練された案である。隅部の塔も城郭の屋根を換骨奪胎したデザインで、嫌味なく、日本的な気分が表現されており、渡辺仁の卓越したデザイン力を示す好例である。戦前期の建築界を最も騒がせたコンペが昭和6年[1931]の「東京帝室博物館」である。応募規定に"東洋風"を掲げたことから、モダニズムの洗礼を受けていた若い世代から反発が起き、応募拒否の動きにまで発展した。最優秀に選ばれた渡辺仁案は、従来の日本趣味建築の傾向を十分に研究し尽くした上での提案で、その集大成と呼ぶにふさわしい内容を持っている。渡辺仁によれば、それまでの日本趣味建築は、木造建築の形式(柱梁構造)をRC造に写し替えるものが主流であったという。それに対し、渡辺仁案は石造表現を基本として、そこに日本や東洋の趣味を加えることを意図したものである。軒の出を抑えた直線的な傾斜屋根と、古典主義美学に基づく躯体部分とが巧みに融合されている。残念ながら、実施段階で若干の手が加えられてしまったが、日本趣味建築の最後を飾る作品であることに間違いはない。

5――歴史主義とモダニズム

「東京帝室博物館」のコンペでは、ル・コルビュジエの元から帰国したばかりの前川國男が、規定を無視したモダニズムの提案で応募し、落選したことはよく知られている。『国際建築』誌は、その落選案を大々的に取り上げ、前川に「負ければ賊軍」[3]という論文を書かせ、歴史主義(あるいは日本趣味)とモダニズムとの相克を描き出した。モダニズム建築の推進を意図した編集人・小山正和の思惑であった。狙いは的中し、"日本趣味建築"="帝冠様式"="日本ファシズムの建築"という図式が出来上がり、民主主義を標榜する戦後の評論家たちによって、モダニズム側の闘いの象徴的な出来事として記録された。渡辺仁は、自分の建築思想をほとんど書き残していない。古今東西の様式に精通し、それらを自在に駆使しながら、独自の作品として提示できるたぐいまれな才能を持ちながら、その建築観や建築思想は全く不明である。それ故"主義と主張の建築"であるモダニズム陣営からは、格好の標的とされてきたのである。

「原邦造邸(現・原美術館)」[1938]は、無装飾の壁、吹抜けのある応接室、屋上庭園、大きなガラスの開口部など、モダニズムの建築言語を身にまとった建築である。当時は中庭側に和館が建っていたが、大部分は空襲時に焼失している。緩やかな曲面が生み出す空間のシークエンス、大理石やタイル、ガラスなどの材質と細やかなディテールからはアール・デコの香りが漂う。歴史主義の骨格をわずかに残し、虚飾をそぎ落とした初期モダニズム住宅の傑作である。

渡辺仁は、ゼセッションや表現派、日本趣味、そしてモダニズムと、スタイルにおいて果敢な挑戦を繰り返してきた。インターナショナルスタイルという建築界の新しい動向も、選択すべき様式のひとつにすぎなかったのである。しかし、明治以来の建築界の宿願でもあった歴史主義の習熟という課題に取り組み、様式建築の円熟化と簡略化を経て、新時代の造形へとつながる数多くの名作を残した業績は大きい。渡辺仁の建築家としての生涯は戦前期において終結していたようだ。戦後は何人かと協同体制を繰り返しながら事務所を続けたが、特に注目すべき建築作品は残していない。昭和48年[1973]9月5日、脳血栓症により死去、87歳の生涯であった。

おおかわ・みつお――日本大学理工学部建築学科教授/1950年生まれ。1973年、日本大学理工学部建築学科卒業。
1975年、同大学大学院修了。博士(工学)。専攻は日本近代建築史。
主な著書:『近代日本の異色建築家』[共著、朝日新聞社/1984]、『近代和風建築 伝統を超えた世界』[共著、建築知識/1992]、『図説 近代建築の系譜』[共著、彰国社/1997]、『建築モダニズム―近代生活の夢とかたち』[共著、エクスナレッジ/2001]、『新版 図説・近代日本住宅史』[共著、鹿島出版会/2008]など。

日本劇場 | かつては朝日新聞社本社屋と並んで建ち、数寄屋橋周辺の豊かな都市空間を形成していた。大きな円弧状の形態を用いることで巧みにまとめ上げられたモニュメンタルな外観。内部はアール・デコ調の華やかなインテリアで彩られていた[出典:『建築の東京』[都市美協会/1935]]

服部時計店(現・和光) | 銀座4丁目の交差点という立地条件を最大限に活かし、隅切りを用い、緩やかな曲面のファサードとしてまとめ上げている。古典主義の持つ普遍性と格調の高さが十分に活かされた名建築。明治期以来の"銀座の時計塔"としての歴史を受け継いでいる[撮影:2009年]

軍人会館コンペ応募案(選外佳作) | 1930年をピークとする"日本趣味"を求めるコンペにおいて、それまでは社寺建築の具象的なモティーフを採用することで、"日本"を表現することが多かったが、皇居のお堀端という立地条件が背景としたこのコンペを機に、"城郭"をモティーフとする提案が初めて登場した。渡辺仁案は塔屋部分の傾斜屋根と壁面下部に城壁を思わせる意匠を採用。抑制の効いた日本的デザインとなっている[出典:『軍人会館競技設計図集』[洪洋社/1931]]

東京帝室博物館コンペ応募案(一等) | 日本趣味建築のデザイン上のポイントは、傾斜屋根と躯体部分との融合にあり、そのために軒先周りや柱梁構造の真壁風のデザインが工夫されてきた。渡辺仁案では、組積造の意匠を用いながらも、両者の融合が意図されていた。柱型を想起させる躯体から、軒先の表現に至る変化が巧みである[出典:『東京帝室博物館建築懸賞設計図集』[東京帝室博物館復興翼賛会/1931]]

[3] 前川國男「負ければ賊軍」『国際建築』1931.6

徳川義親侯爵邸
（現・八ヶ岳高原ヒュッテ）

竣工年：1934年

所在地：長野県南佐久郡南牧村大字海の口
八ヶ岳高原海の口自然郷
規模：地上2階｜構造：木造

2

3

4

1——正面全景：イギリスの中世に生まれたチューダー様式で、直線、曲線、斜線などを組み合わせた軸部と、白壁の対比が美しい。大小4つの妻を重ねたリズミカルな外観意匠も秀逸で、頂部の塔には給水タンクが納まっていた
［補注］2階開口部の天端中央には、徳川家の"三つ葉葵"の紋が見られる（編集部）
2——南西面全景：正面側とは対照的に2つの大きな切妻によって構成されたピクチュアレスクな外観。目白の屋敷では、この洋館より先に建設された「財団法人徳川黎明会」［1932、現存］に隣接して建ち、かつ和館が併設されていた
3——1階ティールーム：チューダー様式ながら、中世的な暗さはなく、明るくすっきりとモダンな雰囲気に仕上げている。徳川邸の時は1階に、応接室、食堂、居間があり、2階に書斎や寝室が置かれていた
4——階段ホール：梁の付け根や階段親柱の上には熊の彫物が置かれている。大の狩猟好きとして知られる徳川義親がスイスでの体験から発案。以後、北海道の名産として広まったとされる

1

東京帝室博物館

（現・東京国立博物館 本館）

竣工年:1937年

所在地:東京都台東区上野公園13-9
規模:地上2階｜構造:SRC造

2

3

4

5

6

1——壮大なバロック風階段:コンペ時には、「線図」と称された略平面図が与えられていた。競技の狙いは外観デザインにあり、内部空間としての最大の見せ場が階段まわりである。格天井の仕上げや照明器具、さらに壁の装飾など、随所に日本風あるいは東洋風のモティーフが採用されている

2——正面全景:実施段階で正面玄関部に妻飾りが付けられ、中心性を強調したデザインに変えられた。真正面の2階に皇族を迎えるための部屋「便殿」が置かれている

3——当選案が持っていた直線的な屋根は、実施段階で反りの強いものに変えられている

4——壁面構成のディテール:和風と洋風と東洋風が混じり合った意匠

5——2階階段ホールの照明:東洋風の装飾を付けたシャンデリア

6——1階ラウンジの壁面ディテール:コンペ時において"東洋風"が謳われていたことから、建物の随所に東洋風の装飾が採用されている

[補注]宮内庁書陵部に残る造営工事図面にも詳細に描かれたこの文様は、「宝相華(ほうそうげ)」と呼ばれる空想上の花文様である。線画部分を窯変モザイクタイルで表し、余白部分は凹凸模様の漆喰表面にニスが塗られた仕上げとなっている(編集部)

1

原邦造邸

（現・原美術館）

竣工年:1938年

所在地:東京都品川区北品川4-7-25
規模:地上2階(一部3階)｜構造:RC造

2

3

4

5

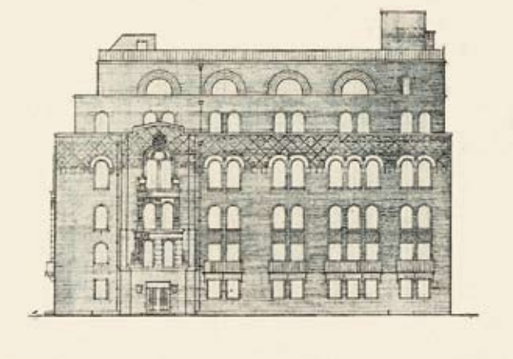
1——2階から3階展示室に上がる階段:緩やかな曲率を描く壁面と曲線的な階段手すり、そして光の効果などによって演出されている。以前は、階段を上ると屋上庭園への出入り口あった
2——アプローチからエントランスを見る:RC造に白い小口タイルをまとった外観は、明らかにバウハウス・スタイルであるが、随所に手堅いスティールワークと色大理石を用いた豪華な仕上げを見せる。歴史主義の美意識が反映されたモダニズム作品
3——中庭側外観:竣工時には中庭側に和館が建っていたが、空襲で大部分が焼失した。中庭側の1階部分は、カフェテリアが増設されている
4——展示室:円弧状に張り出した美しいガラス曲面を見せる。元・朝食室
5——展示室:吹抜けのある玄関脇の元・応接室

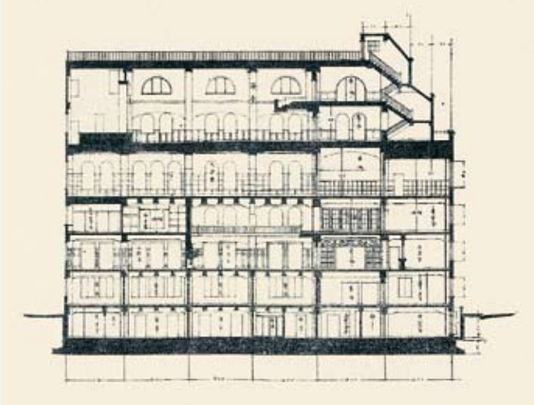
1

2

電気倶楽部

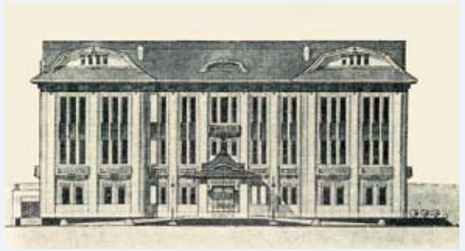
1927年に有楽町に建てられた倶楽部建築。ロマネスク風の半円アーチ、外壁に付けられたイスラム風の装飾文様など、渡辺仁の自由闊達な作風を伝える。内部インテリアには東洋風の要素も加えられていた
1——全景 | 2——正面入り口 | 3——正面図 | 4——断面図[出典:『建築雑誌』1927.10]

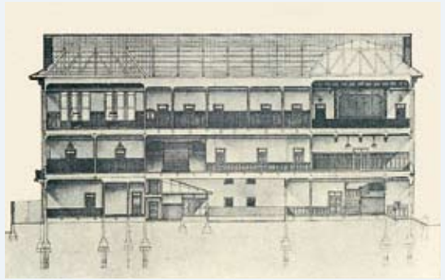

3

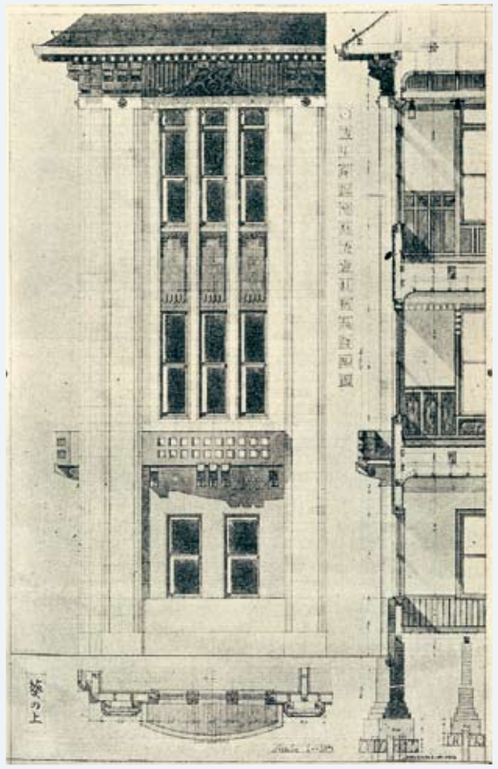

4

日清生命保険相互会社コンペ応募案(二等)

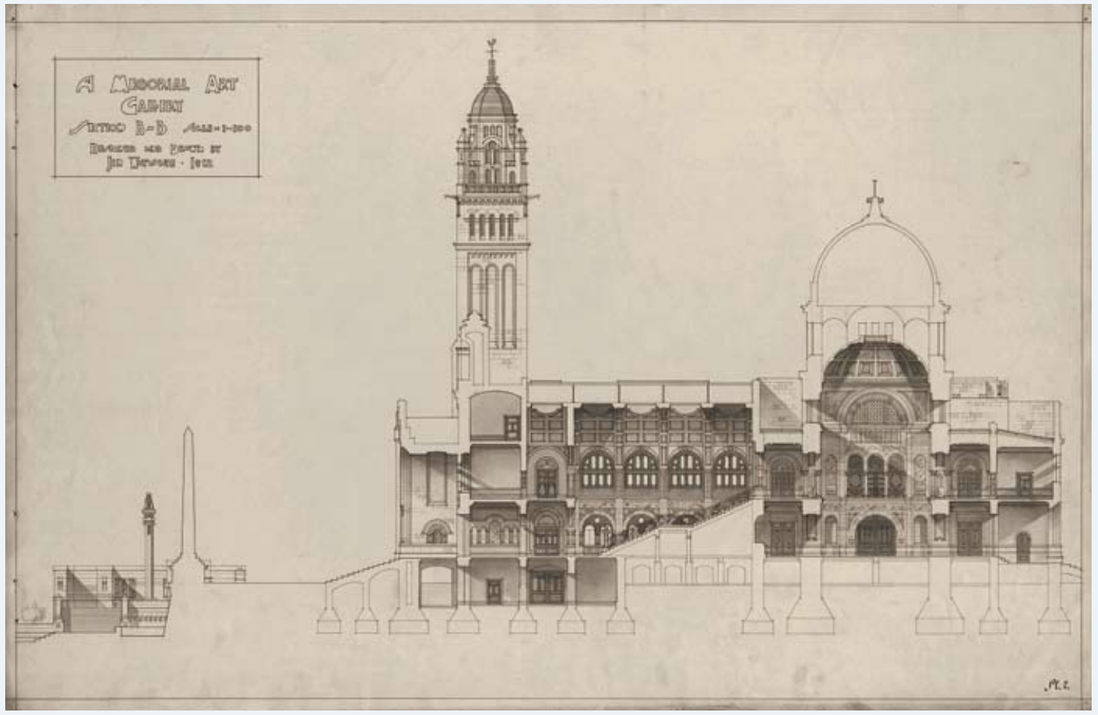
木造の事務所建築ながら、"国風"が求められたコンペ。渡辺仁案は、全体にドイツ風の雰囲気を持ちながらも、「日本建築は軒の建築である」との理解から、日本の伝統的手法を加味し、柱梁構造による直線的な気分を強調している
5——正面図 | 6——縦断面図 | 7——詳細図[1916][出典:『建築雑誌』1916.5]


5


6


7

8



9

8——卒業設計「A Memorial Art Gallery」正面:ロマネスク様式とイスラム様式を混ぜ合わせた様式折衷主義の作品。その後に続く渡辺仁の特徴が顕著に伺える。半円アーチの連続や双塔などは、渡辺仁が好んで用いたモニュメンタルな建築を生み出すための手法
9——同B-B断面[1912][所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

略歴 | Biography

明治20年[1887] 2月16日、東京に生まれる。父・渡は長崎出身の東京帝国大学工科大学教授(採鉱冶金学)、後に学長。母・寿美は荒物屋「万俵」を営んでいた福田敬業の長女。仁は、男3人、女5人の8人兄弟の長男。三女・義乃は、建築家・古宇田実のもとに嫁ぐ。9人目の末娘・龍子が生まれるも、5歳の時に死去。その時以来、渡は仏門にひかれ雲照律師の信者となる。8歳頃までは佐渡に育つ

明治28年[1895] 東京市に戻り、駒込小学校に入学。後に学習院初等部に転校。中等科在学中、狩野友信に師事し日本画を学ぶ

明治39年[1906] 前年、学習院中から、第一高等学校を受験するも失敗。再び一高を受験するが希望かなわず、熊本の第五高等学校第二部に入学

明治42年[1909] 7月、東京帝国大学工科大学に入学。大学時代、透視図の勉強を兼ね、吉田博に師事し水彩画を学ぶ

明治45年[1912] 7月、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業。卒業設計は「A Memorial Art Gallery」。同期生には竹腰健造、山下寿郎、武富英一、吉田享二、西村好時らがいる。後に同級生15人の数にちなんで「苺会」を結成。卒業後は事務所開設の希望があるも、父の反対により鉄道院で働く。新橋駅その他の設計監理を担当したといわれる

大正2年[1913] 9月、鶴見総持寺大梵鐘図懸賞設計に応募。伊東忠太の審査により、渡辺仁の図案が採用。同月、開港記念横浜会館懸賞設計において、高橋理一郎と共に西村好時に協力、二等入選

大正4年[1915] 法学博士で弁護士の菊池武夫の息女・鶴(鶴子とも呼ばれる)と結婚

大正5年[1916] 1月2日、長女・富士江誕生。日清生命保険相互会社設計競技に応募、二等入選。明治神宮宝物殿設計競技に応募、佳作三席

大正6年[1917] 12月1日、逓信省に入省。大臣官房経理局営繕係に所属した。当時の営繕課長は内田四郎、和田信夫や大学同期の武富英一がいた

大正7年[1918] 明治天皇聖徳記念絵画館競技設計に応募、二等首席および三等首席

大正8年[1919] 4月19日、西部逓信局区内へ出張。5月15日、経理局営繕課勤務を命ぜられる。帝国議会議事堂設計競技に応募、入選。父・渡死去

大正9年[1920] 3月まで逓信省に奉職。4月、父の死去も転機となってか、渡辺仁建築工務所を設立。開設後は、主にRC造による堅牢な建物を設計した

大正10年[1921] 川崎米年翁銅像台座指名設計競技に応募、当選

大正15年[1926] 欧米建築研究のため英・独・仏・伊・米の各国を視察

昭和3年[1928] 明治生命保険株式会社指名競技設計に応募

昭和4年[1929] 7月、ドイツ留学から帰国した久米権九郎を迎え入れ、渡辺仁設計工務所内に渡辺・久米建築事務所を開設

昭和5年[1930] 12月15日、軍人会館建築設計競技に応募、選外佳作

昭和6年[1931] 12月、尾張徳川美術館建築設計図案懸賞募集の審査員を務める。東京帝室博物館設計に応募、一等入選

昭和7年[1932] 10月31日、第一生命保険相互会社本館設計競技に事務所内から3案応募、入選:渡辺光雄案。日本放送協会関西支部局舎指名競技設計に2案応募、当選および佳作。久米権九郎は、畠山義孝、羽生价秀ら数名の所員と共に独立して久米建築事務所を開設

昭和8年[1933] 2月、第一生命保険株式会社本館建築部の設立に伴い、松本与作と共に技師に任命され、共同で設計監督を担当。11月、建築学会主催、第7回建築展覧会の第二部懸賞競技の審査員を務める。テーマは「国立公園に建つホテル」。同月、日本放送協会による東京放送会館設計指名競技に応募。指名を受けたのは、西村好時、堀越三郎、渡辺仁、横河時介、高橋貞太郎、山下寿郎、福田重義、石本喜久治、長谷部鋭吉、渡辺節、村野藤吾、安井武雄の12名。当選は山下寿郎案

昭和9年[1934] 5月、東京市庁舎建築設計競技に事務所内から2案応募、一等当選:宮地二郎案、選外佳作一席:大沢浩案。10月、静岡県庁舎競技設計に事務所内から応募、三等一席:大沢浩案

昭和10年[1935] 福岡市公会堂設計競技に応募、佳作

昭和11年[1936] 2月、ひのもと会館建築設計競技に事務所内から応募、二等当選:大沢浩・野口隆・久保田健禄案。京城朝鮮博物館設計競技に応募、佳作。満州国皇帝訪日宣詔記念塔設計競技に応募、二等一席:大沢浩案

昭和15年[1940] 8月、日本郵船の新造船「出雲丸」船室設計を指名されるが、日米開戦・大東亜戦争によって中止

昭和18年[1943] 北沢五郎と共に三井土建総合研究所を設立。建築部長・渡辺仁、副部長・矢部金太郎

昭和20年[1945] 暮れから、三井土建総合研究所からの出向のかたちで2年間ほど、横浜第八軍のGHQディペンデントハウス本牧計画に従事

昭和23年[1948] 三井土建総合研究所を閉鎖。北沢五郎と共に共同建築研究所を開設(昭和28年まで)

昭和28年[1953] 6月、高木秀寛と共に渡辺高木建築事務所を開設

昭和35年[1960] 黄綬褒章を授与される

昭和42年[1967] 12月、渡辺仁建築事務所に商号変更

昭和48年[1973] 9月5日、脳血栓症により逝去(87歳)。戒名「浄光院殿仁寛慈海大居士」

主な作品 | Works | •印は現存 | ※印は所在不明

大正9年[1920] 松平康昌侯爵邸(東京) | 山崎商店(東京) | 山崎亀吉邸(東京)

大正10年[1921] 商工省燃料研究所(埼玉) | 川崎米年翁銅像台座(兵庫)

大正11年[1922] 某氏邸※ | 田川正二郎邸※

大正12年[1923] T氏邸※ | 龍角散本舗(東京)

大正13年[1924] 立憲政友会本部※ | 大和村事務所※

大正14年[1925] 第十五銀行本店※

大正15年[1926] A氏邸※ | T氏邸※ | H氏邸※

昭和2年[1927] 徳川義親侯爵邸(東京・麻布) | 電気倶楽部(東京) | 第一銀行駒形支店(東京) | ホテル・ニューグランド•(神奈川)

昭和3年[1928] 京都安田ビルディング(京都) | 小田原急行鉄道本社(東京) | 安藤組(東京) | 安藤邸(東京) | 交友倶楽部(東京) | 東京火災保険会社浅草支店(東京) | 帝国生命館(東京)

昭和4年[1929] 宇徳ビル(神奈川) | 高島屋飯田合名会社(東京)

昭和6年[1931] 安田ビルディング(大阪) | 八洲ホテル(東京)

昭和7年[1932] 服部時計店•(東京) | 久保盛徳博士邸※ | 財団法人徳川黎明会•(東京)

昭和8年[1933] 産業組合中央金庫(東京) | 日本劇場(東京) | 大松閣(東京) | 明治ビル(東京) | メーソン氏邸(東京) | 東京火災保険京城支店(京城)・神戸支店(兵庫)

昭和9年[1934] 千葉図書館(千葉) | 東横百貨店※ | 徳川義親侯爵邸•(東京・目白、長野に移築)

昭和10年[1935] 旧日向別邸上屋•(静岡)

昭和11年[1936] 天満屋百貨店(岡山) | 大阪放送会館(大阪) | 女子会館※

昭和12年[1937] 東京帝室博物館•(コンペ原案、東京) | 麹町高等女学校(田中秀夫と共同設計、東京) | 三島通陽子爵邸(東京) | 東園基文子爵邸(東京) | 居初寛二郎邸(東京) | N氏邸※

昭和13年[1938] 樋口一成博士邸(東京) | 福屋百貨店(広島) | 原邦造邸•(東京) | 森永製菓本社(東京) | 第一生命保険相互会社本館(松本与作と共同設計、東京)

昭和14年[1939] 明治製菓喫茶店(東京) | O公爵邸※

昭和15年[1940] 帝国鉱業開発会社(東京) | S・T邸※

昭和17年[1942] 日本鋼管株式会社※

取材協力:熱海市観光経済部文化交流課/東京国立博物館/東京大学大学院工学系研究科建築学専攻/原美術館/八ヶ岳高原ロッジ/和光
参考資料:『日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌』伊藤三千雄・前野嶤著[三省堂/1982] | その他:特記のない写真は撮り下ろしです
次号予告:「INAX REPORT No.184」の「続・生き続ける建築」はJ.H.モーガンです